

構文の記述方法と構文の単位を問い直す

—英語の場所格交替を例に—*

野中大輔

dnonaka200@gmail.com

キーワード： 構文交替 場所格交替 スキーマ プロトタイプ 使用基盤モデル

要旨

英語には (a) [NP₁ V NP₂ P_{locative} NP₃] と (b) [NP₁ V NP₃ with NP₂] の交替に参与する動詞が多数存在する。そのような交替のうち、spray/load などの交替 (e.g. John loaded hay onto the truck. / John loaded the truck with hay.) は「場所格交替」(locative alternation) と呼ばれ、数多くの研究がなされてきた。しかし、どの動詞が場所格交替に参与するかとなると、定番となる spray/load などの判断は一致するものの、動詞によっては研究者の判断が一致していないものがある。そのような判断のずれには (i) 交替はするが場所格交替として認定するかどうかでずれるもの、(ii) そもそも交替するかどうかで判断がずれるもの、の2種類がある。本稿は、これまでの研究を再検討し、構文交替の本質を捉えるうえで認知言語学が記述的な道具立て(スキーマ・プロトタイプ)と言語知識のモデル(使用基盤モデル)を提供できることを示す。

1. はじめに

動詞が(その基本的意味を保ったまま)項の表現方法が異なる複数の構文に現れる現象を構文交替(alternation)と呼ぶ。英語には (a) [NP₁ V NP₂ P_{locative} NP₃] と (b) [NP₁ V NP₃ with NP₂] の構文で交替可能な動詞が多数存在する(NP₂には移動物名詞句、NP₃には場所名詞句が現れる)。特に (1)、(2) については「場所格交替」(locative alternation) と呼ばれている。以下、(a) を移動物目的語構文、(b) を場所目的語構文と呼ぶことにする。

- (1) a. John sprayed paint on the wall. (移動物目的語構文)
b. John sprayed the wall with paint. (場所目的語構文)
- (2) a. John loaded hay onto the truck.
b. John loaded the truck with hay.

* 本稿の執筆にあたって、貴重なご助言と励ましのお言葉をくださった西村義樹先生に深く感謝を申し上げたい。本稿の内容は言語学シュンボション、「文法の意味」研究会、認知言語科学研究会にて発表する機会をいただいた。その際にご意見をくださった方々にお礼申し上げる。また、平沢慎也氏、Ash Spreadbury 氏、萩澤大輝氏、氏家啓吾氏からは有益なコメントをいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の成果の一部である。

場所格交替については、これまでに数多くの研究がなされており、その研究成果には一定の合意がある（詳しくは第2節を参照）。どの動詞が交替するのかについても研究が進み、たとえば、Levin (1993) は次のような場所格交替動詞 (spray/load クラス) のリストを報告している。

- (3) brush, cram, crowd, cultivate, dab, daub, drape, drizzle, dust, hang, heap, inject, jam, load, mound, pack, pile, plant, plaster, ?prick, pump, rub, scatter, seed, settle, sew, shower, slather, smear, smudge, sow, spatter, splash, splatter, spray, spread, sprinkle, spritz, squirt, stack, stick, stock, strew, string, stuff, swab, ?vest, ?wash, wrap¹ (Levin 1993: 50)

しかし、上記のリストにもある spray や load といったよく取り上げられるものは交替可能な動詞として広く認識されているものの、研究者の判断が一致しない動詞もある。交替動詞の扱いが一樣でないことについては、これまでの研究で言及されることがほとんどなく、些末な事実だと捉えられているか、またはそのような事実そのものが十分に認識されていないように思われる。しかし、このような判断の不一致について考えることは、構文をどのように記述すべきか、また構文の単位をどのように捉えるべきかといった重要な問題を提起する。本稿では、場所格交替の先行研究を整理したうえで、交替動詞の判断のずれには (i) 交替はするが場所格交替として認定するかどうかでずれるもの (e. g. imprint, present)、(ii) そもそも交替するかどうかで判断がずれるもの (e. g. hang, set) があることを明らかにし、そのようなずれがなぜ生じたのかを考察する。そして、この現象を捉えるうえで認知言語学が記述的な道具立て (スキーマ・プロトタイプ) と言語知識のモデル (使用基盤モデル) を提供できることを示す。

本稿の構成は以下の通りである。本論に入る前に、第2節ではまず場所格交替の研究の流れをおさえておく。第3節では先行研究の交替動詞の判断のずれを詳しく観察し、続く第4節と第5節で上述の (i) 場所格交替かどうかの判断が揺れる動詞と (ii) 交替するかどうか不確かな動詞をそれぞれ取り上げる。第6節は議論のまとめである。

2. 場所格交替研究の流れ

第2節ではこれまでの場所格交替の研究の流れを見ることにする。交替動詞の判断のずれが生じたのはなぜかを解明するうえで、場所格交替がどのように扱われてきたかを理解することが必要だからである。

そもそも構文交替が活発に研究されるようになったのは1960年代からであるが (cf. Hall 1965; Fillmore 1968)、その背景として生成文法の登場によって統語論が重視されるようになったことが挙げられる²。統語論が整備されるにしたがって、統語レベルの意味研究の重要性が認識さ

¹ 「?」が付けられている動詞のうち、vest については、移動物の項に抽象名詞が用いられる点でほかの場所格交替動詞と違うため、リストに含めるのが誤りであるかもしれないと説明されている。prick と wash に「?」を付けた理由については言及がない。prick は第4.3節も参照。

² もちろん、生成文法以前に構文交替について言及がなかったわけではなく、たとえば Jespersen (1927: 241) は present flowers to the young ladies / present the young ladies with flowers などの例を紹介している (Jespersen 自身

れていき、異なる形式であるにもかかわらず実質的に同じ意味を表す（同じ事態を表すのに用いられる）文が存在することに注目が集まったのである³。これにより、構文交替という現象が「発見」され、構文間の関係をどのように捉えるべきか、どのような動詞が構文交替に現れるのかといった問題が扱われるようになった。移動物目的語構文と場所目的語構文の交替もそのような流れの中で注目されていった。

2.1 統語的アプローチ

1960年代の研究では、場所格交替は純粹に統語的な現象として分析されていた。たとえば、生成文法の枠組みで場所格交替を分析した最初期の研究であるHall (1965) では、移動物目的語構文の構造を基本として位置づけ、それに統語変形が適用されることで場所目的語構文が得られるとされた。Fillmore (1968) の格文法 (Case Grammar) の分析では、移動物目的語構文と場所目的語構文に共通の深層構造 (動作主、移動物、場所の3つの深層格が含まれる格枠 (case frame)) を想定し、そこから両構文が派生されると考えられた。

Fillmore (1968: 48, fn. 40) は2つの構文に意味の違いがあることに言及している。たとえば、He sprayed the wall with paint.であれば壁全体がペンキで塗られていることを表すのに対して、He sprayed paint on the wall.は必ずしも壁全体が塗られていなくてもよいことを指摘している。Fillmoreはこれを表層構造上の焦点 (focusing) の問題として捉えることができると述べているが、このような違いは注で述べるにとどまっている。両構文の核となる意味はあくまで同一であり、焦点のような違いは理論的には重要でないと考えたのだろう。

2.2 統語的アプローチの破棄

しかし、1970年代に入ると、2つの構文を統語的操作で結びつけることには問題があることが指摘された。HallやFillmoreが仮定していたような統語的操作では、結び付けられる構文の間で (少なくとも基本的なレベルでは) 意味が変わらないという想定があった。しかし、実際にはそのような表面的な問題では済まされないぐらいに2つの構文の意味は異なるとAnderson (1971) は述べている⁴。Fillmore自身も指摘していた通り、移動物目的語構文の場合は場所の受ける影響は全面的でなくてもよいのに対して、場所目的語構文には場所全体が影響を受ける (場所の

は「交替」という用語は使っていない)。

³ たとえば、Fillmore (1966: 4) は The door will open. / This key will open the door. / The janitor will open the door. / The janitor will open the door with this key. という例を挙げている。これらの文に類義関係あるいは包含関係があるのは明らかだろう。この場合は、構文の違いにかかわらず、the door は影響を受ける対象、this key は行為の手段として用いられる道具、the janitor は行為を行う動作主を表すとされる。Fillmore はこのような例に見られる参加者の同一性に基づいて構文の対応関係を扱うことのできる理論の必要性を訴え、格文法を提唱した。上記のように文の意味が問題になる現象が扱われるようになったのは、生成文法以後であると言われている (安井 1983)。それ以前の伝統的な意味論では語の意味を扱うのが基本であり、文の意味が脚光を浴びるのは、生成文法の登場によって統語構造が活発に研究されるようになってからである。

⁴ Anderson (1971) は事実観察の多くを Fraser の “A note on the spray paint cases” と Chomsky の “Some empirical issues in the theory of Transformational Grammar” に負っている。引用された時点でこれら2つの論考は未発表原稿であったが、後に同名の論文が Fraser (1971)、Chomsky (1972) という形で出版されている。

表面が覆われたり、場所が容器の形状であればそれが満たされたりする) という解釈がなされる。Andersonはそれぞれ部分的解釈 (partitive interpretation)、全体的解釈 (holistic interpretation) と名づけ、それが (4) (5) のような移動物目的語構文と場所目的語構文に変形が施されたものについても成り立つことを示している (Anderson 1971: 390)⁵。したがって、この違いは表層構造で移動物と場所のどちらが目的語に現れるかといった違いには還元することができない (したがって、2つの構文には異なる深層構造を想定する必要がある) とAndersonは述べている。

- (4) a. A pencil would be easy for John to jam into the jar.
 b. The jar would be easy for John to jam with pencils.
- (5) a. It's a pencil that John is certain to jam into the jar.
 b. It's the jar that John is certain to jam with pencils.

部分的解釈、全体的解釈がもっとも明瞭に観察されるのは以下のケースである (Anderson 1971: 389)。移動物目的語構文の場合は、場所が受ける影響が部分的であっても構わないため (6a) のように言っても容認されるが、(6b) では前半の場所目的語構文の一般的な読みである全体的解釈と後半の内容で矛盾があると判断され容認不可となる。

- (6) a. John smeared paint on the wall, but most of the wall didn't get any paint on it.
 b. *John smeared the wall with paint, but most of the wall didn't get any paint on it.

このような意味の違いが認識されるにつれて、移動物目的語構文と場所目的語構文の関係を統語的派生として捉える分析は避けられるようになっていった。また、ほかの言語でも移動物目的語構文と場所目的語構文について研究されるようになり、英語と同様、部分的解釈や全体的解釈といった違いが見られることが報告されていった (たとえば、日本語については Kageyama (1980)、Fukui et al. (1985) などを参照)。

2.3 語彙意味論

統語的派生として結びつけないならば、移動物目的語構文と場所目的語構文の関係はどのように扱えばいだろうか。Rappaport and Levin (1988) やPinker (1989) は統語的操作ではなく動詞の語彙情報から構文の対応関係を説明しようとした。このようなアプローチは語彙意味論 (Lexical Semantics) と呼ばれる。語彙意味論の研究者は、動詞の意味と項構造 (argument structure; 事態の参加者が文中でどのように表現されるか) とがどのように対応するかを探究し、動詞が生起する構文は動詞自体の意味から決定されるという立場を取った。動詞が構文交替に参加す

⁵ 移動物に用いられる名詞は、移動物目的語構文では単数形でもよいのに対し、場所目的語構文では通常複数形である (Anderson 1971: 387)。この観察に基づき、(4a) (5a) では a pencil、(4b) (5b) では pencils が用いられている。

る場合は、一方の意味から他方の意味へと語彙規則による組み換えが起こると考えられている。まず、Rappaport and Levinの分析を見てみよう。

Rappaport and Levin (1988) は、移動物目的語構文に現れるloadの意味構造を (7a) とし、そこから語彙規則によって場所目的語構文に現れる際の意味構造 (7b) が派生されると考えた。そして、それぞれの意味構造が移動物目的語構文と場所目的語構文の統語構造へ連結されると想定している⁶。(7a) が (7b) に組み込まれていることで、両者の意味の類似性が説明されると同時に、(7b) にSTATEの変化が表示されることで、全体的解釈が場所目的語構文のみに見られることを捉えている。

- (7) a. LOAD: [x cause [y to come to be at z]/LOAD]
 b. LOAD: [[x cause [z to come to be in STATE]] BY MEANS OF [x cause [y to come to be at z]]/LOAD] (Rappaport and Levin 1988: 26)

Pinker (1989) は語彙規則のアプローチを洗練させ、場所格交替について極めて示唆に富む分析を行っている (Pinker (2007) も参照)。Pinker は場所格交替の構文の選択には事態に対する捉え方の違いが反映されていると主張している。移動物目的語構文は移動物に起こった変化(移動物の位置変化)に焦点を当てている一方、場所目的語構文では場所に起こった変化(場所の状態変化)に焦点が当たっているのであり、語彙規則の基盤には捉え方の転換 (Pinker は *gestalt shift* と呼んでいる) があるとされる。Pinker の分析では、文字通り「全体」が影響を受けていないのに場所目的語構文が用いられる例についても有効な説明ができる。たとえば、(8) ではペンキが像の一部にただけでも、その美的価値が損なわれるという意味で状態変化があったと判断できるため、場所目的語構文で表現できるとされる。

- (8) The vandal sprayed the statue with paint. (Pinker 1989: 78)

現在では、位置変化と状態変化の観点から場所格交替を捉えるという立場は理論を問わず広く受け入れられており、その意味でPinkerの果たした役割は大きい。なお、語彙意味論の発展とは独立に、日本では池上 (1981) および Ikegami (1985) がPinker (1989) に先立って場所格交替を位置変化と状態変化(状態変化の説明の際には「影響を与える」ことを表す *affect* という用語も使用している) として特徴づけたことは注目に値する(以下、単に「池上」と表記とした場合、池上 (1981) と Ikegami (1985) の両方を指すことにする)。

語彙規則を捉え方の転換だとしたうえで、Pinker (1989, 2007) はどのような動詞に語彙規則

⁶ (7a) の意味を BY (MEANS OF) 以下に組み込み (7b) のような意味を派生するプロセスを語彙従属 (lexical subordination) と呼ぶ。語彙従属は動詞が複数の構文に現れるメカニズムを解明するために Levin and Rapoport (1988) で提案されたものである。たとえば、Pauline smiled. に現れる smile₁ [x DO 'smile'] を拡張することで Pauline smiled her thanks. の smile₂ [x EXPRESS y BY [x DO 'smile']] が得られる (Levin and Rapoport 1988: 283)。

が適用できるかという問題を扱っている。Pinker は構文交替を *broad-range rule* と *narrow-range rule* の2段階で分析している (*broad-range rule* と *narrow-range rule* については、日本語の定訳がない。以下、その意味を汲み取ってそれぞれ上位規則、下位規則と呼ぶことにする)。場所格交替について言えば、位置変化を表す動詞から状態変化を表す動詞への転換という大枠は上位規則で扱われるが、実際の交替の可否を決めるのはより細かい動詞のサブクラスであるとされる。このサブクラスを規定するのが下位規則である。たとえば、*spray* や *splash* などの動詞 (*spray* クラス) は動作主が液体に力を加え、勢いよく飛ばすことを表す。そのような特定の働きかけをもって液体を飛ばすと、液体が場所全体を覆うという結果がもたらされることが予測できる。そのため、動作主が移動物に働きかけて位置変化を引き起こしたという解釈はもちろん、場所へ働きかけて状態変化を引き起こしたとも解釈されるため、移動物目的語構文に加えて場所目的語構文としても表現可能になる。一方で、*dribble* や *pour* などの動詞 (*pour* クラス) は、重力を利用し自然にまかせて液体を移動させることを表すが、この場合、液体がどのように表面に付着するかについて、動作主が完全にコントロールしているとはいえずらい。そのため、動作主が場所へ働きかけて状態変化を引き起こしたとは見なしにくく、場所目的語構文は成立しないとされる。

語彙意味論では核となる意味を共有する動詞群 (動詞クラス) は一定の構文に現れるという想定から、動詞の意味、統語的振る舞いについての分類が進められ、Pinker (1989) や Levin (1993) のような研究によってどの動詞クラスがどの構文に現れるかが詳細に分析されていった。その中でも、Levin (1993) は3000以上におよぶ動詞を構文交替の観点から分類しリストしたものであり、語彙意味論の1つの到達点であると言える。

2.4 構文文法

Rappaport and Levin や Pinker のアプローチでは、一方の意味構造から他方を派生させることから、どちらの意味が基本かという問題設定をする必要がある。しかし、どちらを基本とするかに十分な証拠がないという批判や基準に一貫性がないという批判もある (Iwata (2008) や高見・久野 (2014) にはその問題点が簡潔に説明されている) ⁷。

Goldberg は、構文文法 (Construction Grammar) の観点から場所格交替を扱えばこのような問題を解決できるとしている。Goldberg (1995, 2006) では、動詞だけでなく文の骨組みとなる統語構文も項構造と意味の担い手であること、構文交替は統語派生や語彙規則によって成立するのではなく、動詞が2つの独立した構文と融合することで成立することを主張した。たとえば、*load* の交替は (9) のように表記される。*load* は *loader*、*loaded-theme*、*container* の3つの意味役

⁷ 問題点の1つは、基本となる意味の判定方法である。Pinker (1989) は、前置詞句の省略可能性をもとにどの意味が基本であるかを決めている。He piled the books (on the table). / He piled the table *(with the books). であれば、*pile* は移動物目的語構文で前置詞句が省略可能、場所目的語構文では前置詞句が省略不可能なので、位置変化が基本義、状態変化が派生義であるとされる。しかし、*heap* のようにどちらの前置詞句も省略できない (*John heaped the books. / *John heaped the shelf.) 動詞も位置変化が基本であるとされており、基準が一貫していない。その他の問題については、Iwata (2008) と高見・久野 (2014) を参照のこと。

割を持つとされるが (9a) (9b) それぞれの下段に相当)、その語彙情報が使役移動構文 (移動物目的語構文にあたり、(9a) では caused motion と表記されている) の項構造、使役構文+with句の構文(場所目的語構文にあたり、(9b) では causative+with constructions と表記されている) の項構造と融合することで、場所格交替が成立する。

- (9) a. Caused motion (e.g. *Pat loaded the hay onto the truck*)
 CAUSE-MOVE (cause theme path/location)
 | | | |
Load (loader loaded-theme container)
- b. Causative + with constructions (e.g. *Pat loaded the truck with hay*)
 CAUSE (cause patient) + INTERMEDIARY (instrument)
 | | | |
Load (loader container loaded-theme)
- (Goldberg 2006: 41)

動詞の意味だけが項構造を決める唯一の要因だとすると、動詞が現れる構文の種類が増えるたびに動詞の意味を増やすことになるが、Goldberg (1995) はそのような語彙意味論の分析法を批判している。たとえば、sneeze が *He sneezed the napkin off the table.* に現れうることを説明する場合、語彙意味論では sneeze が移動物や場所の項を取ること、sneeze に「くしゃみをして対象を移動させる」という意味があることを認めなければならないが、Goldberg (1995: 9) はそれは不自然であると言う。このような動詞偏重の分析に反論するため、Goldberg (1995) は、構文が語彙とは独立して担っている役割を前面に出す傾向にあった。しかし、このように語彙か構文かという二項対立を設定することには批判もあり、その後の場所格交替の研究では構文の重要性を認識しつつも動詞の貢献も重視する分析 (Nemoto 2005; Iwata 2008) が行われている⁸。

3. 交替動詞における判断のずれ

上記に見たように、場所格交替は、Hall (1965) や Fillmore (1968) によって関心が高まった結果、数多くの研究がなされるようになった。その過程でどの動詞が交替するかが観察され、Pinker (1989: 126-127) や Levin (1993: 50, 118) で交替動詞の一覧が報告されている。

しかし、先に述べた通り、研究者によって交替動詞の認定には違いがあり、*spray* や *load* のようにほとんどの研究で交替例として挙げられている動詞がある一方で、一部の研究でしか挙がっていない動詞もある。ここでは、そのような動詞の中から *imprint* や *inscribe* のような刻印を表

⁸ Goldberg (1995) でも動詞や形容詞が指定された構文 (e.g. *drive NP {crazy/mad/...}* のような結果構文) について言及しているが、著書全体としては構文の有効性を主張する側面が強かった。Goldberg (2006) では語が部分的に埋まった構文に関する言語知識 (item-specific knowledge) の重要性を強調するようになったが、構文交替についてはそのような観点からの具体的な分析はされていない。

す動詞、presentやsupplyのような授与を表す動詞、hangやsetのような設置を表す動詞（以下、それぞれ刻印動詞、授与動詞、設置動詞と呼ぶ）を取り上げる。先行研究がこれらの動詞をどのように扱っているかを表1に示す。動詞が交替する例として挙げられている場合は「可」、交替しない例として挙げられている場合は「不可」、場所格交替とは別の交替として挙げられている場合は「別」、言及がない場合は「—」としている⁹。参考までにsprayとloadも表に含めた。

表1. 刻印動詞、授与動詞、設置動詞の扱いの違い

		Fraser 1971	奥津 1980	Ikegami 1985	Pinker 1989	Levin 1993	岸本 2001
散布	spray	可	—	可	可	可	可
積載	load	可	可	可	可	可	可
刻印	imprint	可	可	可	別	別	—
	inscribe	可	—	—	別	別	—
授与	present	可	—	可	別	別	—
	supply	可	—	—	別	別	—
設置	hang	可	可	—	—	可	不可
	set	—	—	可	別	不可	不可

表1から、交替動詞の判断のずれは以下のように2つに分けることができることがわかる。

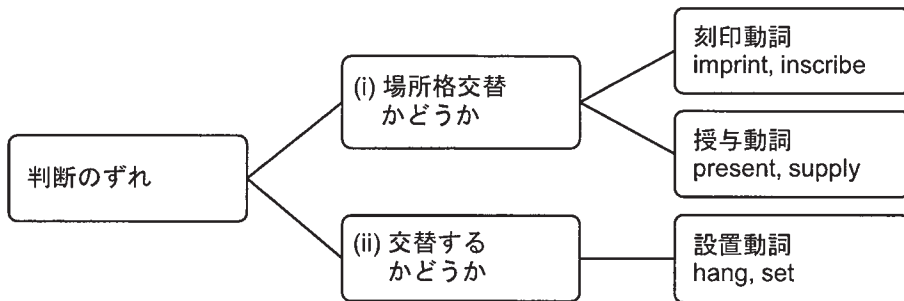


図1. 研究者の判断のずれ

(i) の動詞は、場所格交替として認定するかどうかでずれるものである。刻印動詞 (e.g. inscribe the name on the ring/inscribe the ring with the name) や授与動詞 (e.g. supply food to refugees/supply refugees with food) がそれにあたり、これらの動詞が交替することについては意見が一致しているものの、それを場所格交替とするかどうかについては議論が分かれている。(ii) はhangやset

⁹ Pinker (1989) は、set を imprint や inscribe などと同じ動詞クラスに分類している。

などの設置動詞 (e.g. hang pictures on the wall / hang the wall with pictures) が該当し、そもそも交替するかどうかで判断がずれるものであり、事実認定の段階で意見が一致していない。

このような見解の相違はなぜ生まれたのだろうか。第2節で見た先行研究の流れを踏まえたうえでその理由を探るとともに、場所格交替の研究のあり方を考えていきたい。第4節では刻印動詞や授与動詞を扱い、第5節では設置動詞を扱う。

4. 場所格交替かどうか

1970年代から1980年前半ごろの研究 (Fraser 1971; 奥津 1980; Ikegami 1985) では刻印動詞、授与動詞の例も spray/load 類の動詞ともに挙げられることが多かった。

- (10) a. imprint footsteps on the snow
 b. imprint the snow with footsteps (Ikegami 1985: 289)
- (11) a. present flowers to a person
 b. present a person with flowers (ibid.: 290)

しかし、1980年代後半以後は imprint、present のような例は spray/load 類とは区別される傾向が強くなった。興味深いことに、それは spray/load 類の交替を「場所格交替」と呼ぶことが確立した時期と重なる¹⁰。これは Anderson (1971) の言う部分的解釈、全体的解釈という構文の特徴づけが1980年代に広く定着していったことと連動しているように思われる。つまり、「部分的解釈と全体的解釈の違いが観察されるような交替を場所格交替と呼び、それ以外はたとえ移動物目的語構文と場所目的語構文で交替しても場所格交替には含めない」という想定が暗黙のうちに形成されていったのだと考えられる (第2.3節で述べた通り、現在では Pinker にならない移動物目的語構文と場所目的語構文の特徴を位置変化・状態変化の観点から説明することが多いが、例としてわかりやすいせいか、その後の研究でも構文の意味の違いが部分的解釈・全体的解釈という形で明瞭に現れる (6) のような例が取り上げられることが多い)。

「場所格交替」という用語をどの範囲で使うかについて明言している文献は少ないが、たとえば Iwata (2008) は場所目的語構文が cover (覆う) または fill (満たす) の意味で使われている (つまりは、全体的解釈が見られる) ときのみを場所格交替として扱うと述べており、Anderson (1971) の影響が色濃く残っているように思われる (実際、Iwata (2008) は数多くの場所格交替動詞の例を分析しているが、imprint や present のような例には一切言及していない)。このように、場所格交替研究の流れをたどると、理論と記述が複雑に影響し合っていることがわかる。格文法のような言語理論が提案されたおかげで言語事実の記述が進むと、今度は新たに発掘さ

¹⁰ 1980年代前半まで構文交替という用語が用いられることはあっても、「場所格交替」という特定の名称は与えられていなかった。Levin (1993) は spray/load タイプのほか、swarm タイプ (e.g. Bess are swarming in the garden. / The garden is swarming with bees.) や clear タイプ (e.g. John cleared dishes from the table. / John cleared the table of dishes.) も「場所格交替」に含めており、いずれの交替でも部分的解釈・全体的解釈の違いが見られるとしている。

れた事実（部分的解釈、全体的解釈）が言語理論の再考を迫り、それを重視した理論においてはいつの間にか記述の範囲が狭くなっていた、とでも言えるだろう。以下、部分的解釈・全体的解釈に着目しながら、*spray/load* 類の動詞と刻印動詞、授与動詞の違いを見てみよう。

4.1 刻印動詞と授与動詞の交替

*spray/load*類の動詞の場合、移動物名詞句に不可算名詞や名詞の複数形（認知文法では、不可算名詞と可算名詞の複数形をまとめて*mass*と呼ぶ）、場所名詞句に何かの表面や容器を表すものが用いられ、場所目的語構文は典型的には全体的解釈を受ける。一方、刻印動詞の移動物にあたるのは文字や印形である。場所目的語構文を用いた場合、場所の表面が文字だけであることを表すわけではないため、全体的解釈はなされない。*imprint*や*inscribe*を*spray/load*とは別扱いする理由として、Levin (1993: 66, 169-170) は刻印という意味のサブクラスを形成すること、全体的解釈が見られないことを挙げ¹¹、そのような動詞の交替を*image-impression alternation*と名付けた。*imprint*、*inscribe*と同種の動詞には*emboss*、*embroider*、*mark*、*tattoo*などがある。

一方、授与動詞では場所にあたるのは人間（受領者）であり、場所目的語構文は全体的解釈ではなく所有という概念との結びつきで捉える必要がある。*spray*や*load*の移動物目的語構文では、移動物が着点（場所）に至る経路を様々な前置詞で表現できるが、授与動詞の移動物目的語構文では、*to*（または*for*）に限定されている¹²。

- (12) a. Jessica loaded boxes on the wagon.
 b. Jessica loaded boxes onto/into/under the wagon.
 c. Jessica loaded the wagon with boxes. (Levin 1993: 118)
- (13) a. Brown presented a plaque to Jones.
 b. *Brown presented a plaque near/next to/at Jones.
 c. Brown presented Jones with a plaque. (ibid.: 140)

また、これらの動詞は、賞の授与 (*present*) や必要物資の供給 (*supply*) のように、受領者が移

¹¹ 刻印という意味のサブクラスを形成することが *imprint* や *inscribe* を *spray/load* から区別する要因になるなら、*spray* のように液体を場所の表面に散布することを表す動詞、*load* のように容器への積載を表す動詞も、それぞれ *spray* クラスや *load* クラスといった異なるサブクラスを形成していると分析することも可能なはずである。しかし、Levin (1993) は場所目的語構文で全体的解釈が得られることを理由に *spray* や *load* は同じサブクラス (*spray/load* クラス) に分類している。このような扱いは、動詞の分類方法が一貫しているのか、動詞分類上そこまで全体的解釈の有無を重視する必要があるのかといった疑問を招く。実際、Pinker は場所格交替全体を包括するような特徴を上位規則で捉えたとうえで、*spray* や *load* をそれぞれ別のサブクラスに分類している（下位規則）。このように、語彙意味論の立場の間でも動詞分類方法について合意があるわけではない。

¹² その意味で、*present* や *supply* などの授与動詞は与格交替 (i) の動詞に近い。Pinker (1989) は *present* や *supply* は与格交替動詞と場所格交替動詞の中間にあると述べている。

(i) a. John sent a letter to Mary. b. John sent Mary a letter.

実際、一部の動詞 (*leave* や *serve*) は (ia) だけでなく (ib) の二重目的語構文にも現れる（したがって、移動物目的語構文、場所目的語構文、二重目的語構文の3つに現れる）とされている (Levin 1993)。授与動詞については、紙幅は少ないものの Pinker (1989: 111-112, 216-217) の議論が有益である。

動物を受け取るに値する行為を行った場合や移動物を必要としている際に用いられるのが特徴であり (Pinker 1989: 111-112, 216-217)、こうした特徴の違いを根拠に *spray* や *load* とは別のクラスをなすと判断されている。Levin (1993: 65-66, 140-141) はこの種の交替を *fulfilling alternation* と呼んでおり、*present* や *supply* 以外には *credit*, *furnish*, *provide*, *serve* などが含まれる。

このように分類を細かくしたところで何も害はないと思うかもしれないが、こうした扱いには2つの問題点を指摘することができる。1つは、上記のように区別された構文がなぜいずれも $[NP_1 V NP_2 P_{locative} NP_3]$ と $[NP_1 V NP_3 with NP_2]$ という形式で表されるかについて議論を展開していないことである。*spray/load* の場所格交替とは異なる特徴が刻印動詞や授与動詞の交替にあったとしても、形式を共有している以上それらがどのように関係しているのかを明らかにする必要があるはずである。2つ目の問題点は、実際には *spray* に *imprint* タイプの用法 (14) があること、*load* に *present* タイプの用法 (15) があることが見過ごされてしまっていることである。

- (14) a. A knot of youths swaggered along the pavement opposite along a wall sprayed with graffiti.
 b. Brown entrails seemed to bulge from the walls, sprayed with pious mottos. (BNC¹³)
- (15) a. Elaine was loaded down with towels, and bags full of swimwear and sun creams.
 b. The King and Queen loaded him with wealth and honours ... (BNC)

語彙意味論の発展により、動詞クラスを分け構文のタイプを細分化していく方向で研究が進められてきたことは第2.3節で述べた通りである。そのような研究のおかげで動詞の記述が進んだことは間違いないが、場所格交替について言えば、部分的解釈・全体的解釈という特徴が過度に強調され、それに基づく構文の分類方法が確立した結果、かえって記述の精度が下がってしまっている側面があると言える。

4.2 スキーマとプロトタイプからの特徴づけ

こうした現象の正確な記述のためには、構文全体の共通性、すなわちスキーマ (schema) とスキーマの典型的な事例であるプロトタイプ (prototype) の両方を捉えることが必要だろう (Langacker 1990)。場所目的語構文のスキーマ (*spray/load*、刻印動詞、授与動詞の場所目的語構文に共通する特徴) は、第2.3節で紹介した池上の言う「影響を与える」(*affect*) という形で捉えるのがよいと思われる¹⁴。*imprint* や *inscribe* の場所目的語構文に関して言えば、場所が特定

¹³ BNC は British National Corpus の略である。本稿では Davies (2004-) が運営する BYU-BNC を利用した。

¹⁴ 池上における *affect* は、Bolinger (1975) が受身の分析で使用した *affect* と同じ趣旨であると考えてよいと思われる。Bolinger は受身の特徴として主語の指示対象が影響を受ける (*affected*) ことを挙げている。たとえば、**I was approached by the train.* が容認不可である一方、*I was approached by the stranger.* が成立するのは、前者の場合電車の位置関係を言うだけで「私」が電車の接近によって何か影響を受けたとは言いがたいのに対して、後者は物乞いなどが近づいてくれば心理的に「私」は影響を受けるからだと言われている (Bolinger 1975: 68)。このように *affect* の指す範囲は物理的な影響に限定されないため、池上の挙げた例文 (11b) のような場合についても問題なく当てはまる (*present* に関しては Green (1974: 87, fn1) も参照のこと)。*affect* という用語

の機能やデザインをもったものになるという事態は、場所への影響として捉えることは自然であると言える。また、*present the students with certificates*のように学生が修了証明書を与えられるという例であれば、その学生は有資格者へ変わったのだと解釈できる。その場合は、学生に影響を与えたという捉え方がなされるのも自然だろう。

Pinkerは場所目的語構文について状態変化として説明しているが、これも池上の言う *affect* と同じ趣旨のものであると考えることができるし、実際Pinker (1989: 78) 自身 *affect* という用語も使用している。Pinker (1989) では主たる関心が *spray/load* の交替であり、刻印動詞や授与動詞の交替については部分的にしかなかつていないが、Pinkerが上位規則と下位規則の2段階で場所格交替を扱ったことを踏まえれば、場所目的語構文を状態変化として捉える上位規則をスキーマとして捉え、その事例に *spray/load* のみならず刻印動詞や授与動詞を位置づけるということも十分にできるはずである¹⁵。

そのようにスキーマを捉えたうえで、Levin (1993) などで指摘された点については、*spray/load* の場所格交替動詞、刻印動詞、授与動詞などの各構文のプロトタイプにおける特徴として捉えればよいのではないかと思われる。その段階の特徴づけとして、*spray* や *load* の場所目的語構文が全体的解釈を得やすいといった記述は有効だろう。*spray the wall with paint* や *load the truck with hay* と聞いて思い浮かぶ典型的な状況では、場所全体が覆われたり満たされたりしてはじめて有意義な変化が起こったと認識されることが多いからである (Pinker 1989: 78; 坪井・西村 1990: 27)。

このように捉えると、移動物目的語構文、場所目的語構文はいくつかの下位構文を従えた構文カテゴリーだということになるが、そのような(家族的類似性を見せる)下位構文の集合体を形成するのは統語構文一般によく見られることである。たとえば、Lakoff (1987: Case study 3) は、*there* 構文が大まかに直示の *there* 構文と存在の *there* 構文に分かれること、それぞれが中心事例をもとにいくつかの下位構文が見られることを指摘している(直示の *there* 構文であれば中心にあるのは *There's Harry with the red jacket on.* であり、そのほかに知覚をあらわす *There goes the bell now!* や物を渡すときに使われる *Here's your pizza, piping hot!* などが挙げられる)。このよう

については、Pinker (1989) が受身について扱った箇所や西村・長谷川 (2016) の議論も参考になる。

¹⁵ Iwata (2008) は場所目的語構文を状態変化として特徴づける説を批判している。状態変化動詞 (e.g. *break*) であれば対象が影響を受ける部位を前置詞句で表現できないはずであるが (i)、場所目的語構文の場合そのような表現が可能である (ii)。したがって場所目的語構文の意味を状態変化だとするのは妥当ではないと Iwata は述べている(その他の理由については Iwata (2008: 22-25) を参照)。なお、(ii) は Iwata の挙げた例ではなく、筆者自身が見つけた事例である (*Food & Wine: an entire year of recipes 2006*, American Publishing Corporation, p. 182, 強調は引用者による)。

(i) *John broke Bill *on the arm*. (cf. ^{OK}John hit Bill *on the arm*.)

(ii) Sprinkle the tuna steaks *on both sides* with the spice mixture and let stand for 15 minutes.

しかし、Pinker が言う状態変化は *break* など表される状態変化と必ずしも同じだと捉える必要はないだろう。実際、先に挙げた例文 (8) や “loading hay into a wagon is something that happens to hay; loading a wagon with hay is something that happens to a wagon” (Pinker 1989: 79) といった説明からうかがえるように、場所目的語構文の状態変化は、*break* などに見られるような狭義の物理的变化に限定して解釈する必要はないと考えられる。繰り返しになるが、Pinker (1989) の言う状態変化は、池上の言う *affect* に近い用語として捉えるべきだろう (Jackendoff (1990) の場所格交替の分析を批判した坪井・西村 (1990) も参照のこと)。

に、各種構文のプロトタイプ的な特徴を明らかにするとともに、構文の境界事例に着目しながら構文間の連続性を捉えることが重要である。

4.3 「場所格交替」という名称

日本語の場所格交替の研究 (e.g. Kageyama 1980, Fukui et al. 1985) では、「刺す」が交替動詞として挙がることが多い (e.g. 針を指に刺す／指を針で指す)。しかし、Iwata (2008) は、「覆う」「満たす」の意味が関与するものだけを場所格交替とすると述べ、「刺す」を場所格交替から除外している。英語の場合でも「刺す」に当たる動詞 (e.g. pierce, prick, stick) は場所格交替に含めるかの判断が揺れている。たとえば、Pinker (1989) には言及がなく、Levin (1993) は、stickを交替動詞として挙げているもののprickについては「？」を付けており、場所格交替に含めてよいのか確信がないようである ((3) で挙げたリストを参照のこと)。Fukui et al. (1985: 7-8) はstick a needle in Hanako's hand/stick Hanako's hand with a needleという例を挙げ、後者の方が手全体が影響を受けていることを表すと述べている。そうであれば前節で述べた場所目的語構文のスキーマのもとに位置づけることができ、たとえspray/loadで見たのと同じ意味での全体的解釈が得られなくても場所格交替から除外する必要はなくなると言える。

この点を考えるうえで参考になるのは本多 (2014) である。一般的に中間構文は他動詞 (e.g. sell) をもとに形成され、The book sells well.のような例がプロトタイプだと考えられてきたが、本多 (2014: 15) はこれまで中間構文とは分類されてこなかったThe shelving comes to pieces for easy transport. (自動詞comeが用いられている) も中間構文に含める可能性を示している。一度研究方法や研究上の用語が定まってしまうと、それにつられて言語現象を捉えがちだが、それにより一部の事例に研究が偏ったり、従来の想定からは外れるような事例に注意が向けられなくなってしまう危険がある点は、中間構文の場合も、場所格交替の場合も同じであろう。本多は「中間構文」の範囲をどのように捉え、どの事例を別のカテゴリーとして扱うかは構文自体の特徴から客観的に決まるのではなく、研究者の「選択」の問題であると述べている。同様に、「場所格交替」という用語をどのような範囲で使うか (spray/loadに限るのか、刻印動詞や授与動詞、「刺す」などの動詞まで含むのか) についても、研究者自身の自覚的な選択が求められる。そのうえで、範囲から外した交替との関係についても論じていく必要があるだろう。

5. 交替するかどうか

hangやsetのような設置を表す動詞については、Fraser、奥津、Ikegamiなどは交替動詞として載せているが、それ以後の研究での扱いは統一が取れていない。Levin (1993) はhangを交替動詞のリストに含める一方、setは非交替動詞のリストに入れている。岸本 (2001) はhang、setともに非交替だと述べている。

- (16) a. John hung pictures on the wall.
 b. John hung the wall with pictures. (奥津 1980: 95)

- (17) a. set diamonds in a crown
b. set a crown with diamonds (Ikegami 1985: 287)

ただし、hangの交替例を挙げている奥津（1980）は、次のような興味深い内容を述べている（例文番号のみ変更）。

- (18) (16a) では“pictures”が目的語となり、(16b) では“the wall”が目的語となっている。私のインフォーマントによると、(16a)の方が自然ではあるが、どちらも文法的な文であり、同義である。(奥津 1980: 95)

つまり、奥津のようにhangが交替可能だという研究者も、自然さに微妙に違いがあることは認識しているのである。

実はhang/setの場所目的語構文が観察されるのは、実質的に結果状態を表す受身 [NP₃ (be) hung/set with NP₂] に限定されている（以下、この種の受身を形容詞的受身と呼ぶ）。

- (19) a. The bedchamber was hung with silks which were so fine that they bruised if something brushed against them.
b. In the corner of the room is a large bed hung with a dark musty surrounding curtain. (BNC)
- (20) a. In the event her crown was set with no less than 4,936 diamonds ...
b. ... and the episcopal ring would be made of gold and set with a precious stone. (BNC)

hang/setが交替すると述べる研究者・インフォーマントは受身が成立するなら能動文も成立するはずだと考え、交替しないとする者は受身の例しか見たことがなく、交替するなどとは思いつかなかった可能性がある。さらに興味深いことに、hang/setを用いた場所目的語構文の受身は移動物目的語構文のときはNP₂やNP₃の分布が一致しない傾向にある。たとえばsetの場合、「宝石」に関する例が多いが（The ring is set with diamonds）、移動物目的語構文にはそのような傾向はなく、様々な名詞が現れる。

このような事例が存在することは、使用基盤モデル（Langacker 1990, 2000）の立場からは自然な現象として捉えることができる。使用基盤モデルでは、実際の言語使用（usage event）の中で繰り返し現れるものが抽出されることで構文のスキーマが得られると想定されている。スキーマには抽象度の高いものから、部分的に語が指定された具体性の高いものまでの段階性が認められ、具体性の高い下位レベルのスキーマも言語知識を構成する重要な一面だと考えられている。第4.2節では場所目的語構文の上位スキーマを想定し、その下位スキーマとして動詞クラスが指定されたspray/loadや刻印動詞の場所目的語構文を位置づけた。それよりもさらに具体性の高い表現、つまりNPスロットが埋まり、形容詞的受身と組み合わさった表現が慣習的な単位

になっていることは、下位スキーマの重要性を認める使用基盤モデルなら適切に位置づけることができるのである。使用基盤モデルの論理的帰結として、Taylor (2012) はメンタル・コーパスという考えを打ち出し、具体性の高い表現が記憶の単位となっていることを数多くの構文で例証している。そのような考えを基にすれば [NP₃ (be) set with diamonds] のような表現が母語話者の頭の中に蓄えられていると捉えることが説得力を持つだろう¹⁶。

第2.4節で紹介したように、構文文法における場所格交替の分析は、抽象的な構文の役割を重視したものから、語彙、特に動詞の貢献に関心を向けた研究へと力点が移ってきた。hangやsetの例は、共起する名詞やほかの構文（形容詞的受身構文）との組み合わせも構文の基本単位として捉えることが重要性であることを示している。このような具体性の高い表現が言語知識として蓄えられていると考えるほうが、ある動詞を交替可能／不可能といった二択だけで分析するよりも妥当であろう¹⁷。使用基盤モデルの観点から交替現象を捉え直すと、交替可能であるというのは、2つの構文スキーマ（e.g. [NP₁ load NP₂ P_{locative} NP₃] / [NP₁ load NP₃ with NP₂]）の間に対応関係が見出せる現象だと言える。それに対して、交替の判断が割れるというのは一方の構文スキーマが十分に定着していない（下位レベルの具体的な表現のみが定着している）ために構文スキーマの対応関係が見出しづらい現象であるとまとめることができる。

慣習的な単位に着目することは、交替の判断にずれがないものに関しても重要である。以下のように、典型的な場所格交替動詞だとされているloadにおいても、場所目的語構文の形容詞的受身のときのみ成り立つ表現がある。この場合は [NP₃ (be) loaded with meaning] のような単位が言語知識として蓄えられていることが想定できる¹⁸。

- (21) a. *Mary loaded meaning into her voice.
 b. *Meaning was loaded into her voice.
 c. *Mary loaded her voice with meaning.
 d. Her voice was loaded with meaning. (野中 2015: 96)

¹⁶ *Longman Dictionary of Cotemporary English* (第6版) では動詞 hang に be hung with という小項目があり、“if the walls of a room are hung with pictures or decorations, the picture etc are on the walls”と説明されている。setの形容詞の項目にも be set with germs/jewels etc という小項目が設けられ、“to be decorated with jewels”という説明がある。このような辞書の記述は、形容詞的受身として使うと同時に、NP₂やNP₃に名詞句が指定された形が慣習的な単位になっていることを示すものである。

¹⁷ こうした考えは次のような例を考えるうえでも有効だろう。expect NP to VP に対応する受身文は NP is expected to VP である。この種の受身文には NP is {intended/meant} to VP のように定着度が高く、使用範囲からいっても能動文とは単純な対応関係にないように思われるもの、NP is said to VP のように対応する能動文が存在しないもの (say NP to VP とは言えない) がある。さらに、NP is rumored to VP について言えば、この構文のときにだけ rumor が動詞として使われる (当然対応する能動文はない) という特異性がある。この問題を考える際にも、ある動詞が受身化可能／不可能という二択だけで考えるのではなく、NP is rumored to VP のような表現自体が慣習的な単位になっていることを認める必要がある。

¹⁸ ほかに She is loaded with talent. や Your meal is loaded with calories. といった例がある。このような be loaded with NP という表現が成立する動機づけとして、野中 (2015) は当該の状態をまるで詰め込むという変化の結果であるかのように捉える「仮想上の変化」を挙げている。このような複数の構文の組み合わせを認知言語学、特に構文文法でどのように扱うかについては野中・貝森 (2017) を参照されたい。

したがって、使用基盤モデルの考えは、hangやsetのように交替するかどうかの判断が割れる動詞だけでなく、spray/loadのように典型的な場所格交替動詞を分析するうえでも多くの示唆をもたらすと言える¹⁹。

6. まとめ

本稿では、(a) [NP₁ V NP₂ P_{locative} NP₃] と (b) [NP₁ V NP₃ with NP₂] の交替に着目し、(i) 交替はするが場所格交替として認定するかどうかでずれるもの、(ii) 交替するかどうかで判断がずれるもの、の2種類があること、それらの例はスキーマ・プロトタイプと使用基盤モデルの観点から分析する必要があることを主張した。構文の分類に見られる境界事例、交替・非交替の境界事例を適切に扱うことは、spray/loadのように多くの研究者の判断が一致するものを分析する場合にも有効であり、構文交替の本質に迫るうえで重要であると言える。

参考文献

- Anderson, S. R. (1971) On the role of deep structure in semantic interpretation. *Foundations of language* 7: 387-396.
- Bolinger, D. (1975) On the passive in English. In: A. Makkai and V. B. Makkai (eds.), *The first LACUS forum*, 57-80. Columbia, South Carolina: Hornbeam Press.
- Chomsky, N. (1972) Some empirical issues in the theory of Transformational Grammar. In: *Studies on semantics in Generative Grammar*, 120-202. The Hague: Mouton.
- Davies, M. (2004-) BYU-BNC: The British National Corpus. Available online at <http://corpus.byu.edu/bnc>.
- Fillmore, C. J. (1966) Toward a modern theory of case. The Ohio State University Project on Linguistic Analysis, Report 13. 1-24.
- Fillmore, C. J. (1968) The case for case. In: E. Bach and R. T. Harms (eds.), *Universals in linguistic theory*, 1-88. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Fraser, B. (1971) A note on the spray paint cases. *Linguistic inquiry* 2: 604-607.
- Fukui N., S. Miyagawa and C. Tenny (1985) Verb classes in English and Japanese: A case study in the interaction of syntax, morphology and semantics. *Lexicon Project Working Papers* 3, Center for Cognitive Science, MIT, Cambridge, MA.
- 本多啓 (2014) 「プロトタイプカテゴリーとしての英語中間構文再考」『神戸外大論叢』 64: 15-44.
- Green, G. M. (1974) *Semantics and syntactic regularity*. Bloomington: Indiana University Press.

¹⁹ なお、設置動詞以外では、液体をかけることを表す動詞 (e.g. drizzle) が交替するかどうかについても議論がある (Pinker 1989; Iwata 2008)。実は、drizzle は、ドレッシングをかけるといったレシピでの用法 (e.g. Drizzle dressing on the salad. / Drizzle the salad with dressing.) の場合、移動物目的語構文、場所目的語構文ともに慣習化している (野中 2017)。実際の言語使用で触れる表現からボトムアップに言語知識が形成されるとする使用基盤モデルであれば、動詞や構文についての言語知識に、レジスターや典型的な使用文脈の情報が含まれていることも適切に捉えることができる。

- Goldberg, A. E. (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, A. E. (2006) *Constructions at work: The nature of generalization in language*. Oxford: Oxford University Press.
- Hall, B. (1965) Subject and object in English. Ph. D. dissertation, MIT.
- 池上嘉彦 (1981) 「‘Activity’ — ‘accomplishment’ — ‘achievement’: 意味構造の類型 (4)」『英語青年』 126(12): 622-625.
- Ikegami, Y. (1985) ‘Activity’ — ‘accomplishment’ — ‘achievement’: A language that can’t say ‘I burned it, but it didn’t burn’ and one that can. In: A. Makkai (ed.), *Linguistics and philosophy: Essays in honor of Rulon S. Wells*. 265-304. Amsterdam: John Benjamins.
- Iwata, S. (2008) *Locative alternation: A lexical-constructional approach*. Amsterdam: John Benjamins.
- Jackendoff, R. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jespersen, O. (1927) *A modern English grammar on historical principles*, Part III. London: George Allen & Unwin.
- Kageyama, T. (1980) The Role of thematic relations in the spray paint hypallage. *Papers in Japanese linguistics* 7: 35-64.
- 岸本秀樹 (2001) 「壁塗り構文」影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』100-126. 東京: 大修館書店.
- Lakoff, G. (1987) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1990) *Concept, image, and symbol: The cognitive basis of grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (2000) A dynamic usage-based model. In: Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-based models of language*, 1-63. Stanford: CSLI Publications.
- Levin, B. (1993) *English verb classes and alternations: A preliminary investigation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Levin, B and T. R. Rapoport (1988) Lexical subordination. *CLS* 24: 275-289.
- Nemoto, N. (2005) Verbal polysemy and Frame Semantics in Construction Grammar: Some observations on the locative alternation. In: M. Fried and H. C. Boas (eds.), *Grammatical constructions: Back to the roots*, 119-136. Amsterdam: John Benjamins.
- 西村義樹・長谷川明香 (2016) 「語彙、文法、好まれる言い回し」藤田耕司・西村義樹 (編) 『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ』 282-307. 東京: 開拓社.
- 野中大輔 (2015) 「英語の場所格交替動詞の拡張用法: 仮想変化表現の観点から」『東京大学言語学論集』 36: 93-102.
- 野中大輔 (2017) 「非交替動詞が交替するとき: 類推と文脈から見る構文の生産性」 *Human linguistics review* 2: 47-63.

- 野中大輔・貝森有祐 (2017) 「構文継承の精緻化を目指して：複数の構文が関与するとき」『日本認知言語学会論文集』 17: 297-309.
- 奥津敬一郎 (1980) 「動詞文型の比較」国広哲弥 (編) 『日英語比較講座2 文法』 63-100. 東京：大修館書店.
- Pinker, S. (1989) *Learnability and cognition: The acquisition of argument structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Pinker, S. (2007) *The stuff of thought: Language as a window into human nature*. New York: Viking.
- Rappaport, M. and B. Levin (1988) What to do with theta-roles. In: W. Wilkins (ed.), *Syntax and semantics 21: Thematic relations*, 7-36. New York: Academic Press.
- 高見健一・久野暉 (2014) 『日本語構文の意味と機能を探る』 東京：くろしお出版.
- Taylor, J. R. (2012) *The mental corpus: How language is represented in the mind*. Oxford: Oxford University Press. [西村義樹ほか編訳 (2017) 『メンタル・コーパス：母語話者の頭の中には何があるのか』 東京：くろしお出版.]
- 坪井栄治郎・西村義樹 (1991) 「認知意味論と概念意味論」『実践英文学』 39: 23-37.
- 安井稔 (1983) 「まえがき」安井稔ほか『英語学大系5 意味論』 v-xiii. 東京：大修館書店.

Rethinking Constructional Description and Linguistic Units: The Case of the Locative Alternation in English

Daisuke Nonaka
dnonaka200@gmail.com

Keywords: grammatical alternation, locative alternation, schema, prototype, usage-based model

Abstract

In English, a wide variety of verbs enter into the alternation between (a) [NP₁ V NP₂ P_{locative} NP₃] and (b) [NP₁ V NP₃ with NP₂]. Examples of this phenomenon involving such verbs as *spray* and *load* (e.g. *John loaded hay onto the truck. / John loaded the truck with hay.*) have been extensively discussed in the literature under the rubric of the “locative alternation.” While linguists generally agree that *spray* and *load* participate in this alternation, they are far from unanimous when it comes to (i) whether certain alternating verbs should be classified as locative alternation verbs and (ii) whether some verbs really alternate in the first place. After reviewing the previous studies, this paper argues that cognitive linguistics provides us with the descriptive constructs (e.g. schema/prototype) and basic vision (i.e. the usage-based model of language structure) that we need to figure out what grammatical alternations are all about.

(のなか・だいすけ 国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員)